俺の審判は……

蓮千里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の審判は……

【Ｎコード】
Ｎ４６６５Ａ

【作者名】
蓮千里

【あらすじ】
旅をしながら、剣術・体術を極める人影ただひとつ。全てのきっかけは１０年前。１０年前から歯車は狂っていったのだ。

（前書き）

天秤座の女神よ

貴女は何を伝えたいのですか？

一体、今何時なのかわからない。
ここがどこかも分からない。
ただわかるのは、自分が返り血を浴び、服と周囲から血の臭いがするということ。
そして、自分は負けるわけにはいかないということだけ。

「残りは、てめえだけだな」
どこからみても旅人の少年が、大男を前にして鼻で笑いながら余裕を見せる。

「よくも――――！」
大男は配下の男たちを目の前で殺されてくざまを見た。
血が上って、我を忘れ二本の刀を持って少年に襲いかかる。
「死ね――――！！」

ガキン！！ガキンガキン……！！

大男は少年を見ながら倒れた。

細い腕に握られた一本の刀で、少年は二本の刀をさばき、大男を地獄へ送った。

「———っと……もう、終いか」

声の主は、欠伸をしながらあたりを見回すと、ごく普通に歩き出す。

何事も無かったように。

「もっと強いと思ったけど、間違いだったな」

足を止め、振り返りながら、はっきりと言う。

「俺に因縁つける暇あったら、てめえの腕磨けよ……って聞こえてねえか。

じゃあ、あの世を楽しみな」

少年が背中を向けて歩き出す。口元に笑みを浮かべて。

「お疲れ、白夜（びゃくや）。どこで寝ようか」

そう言いながら血を拭い取り、鞘に収める。

白夜というのは刀の名前らしい。

「これで４９９３戦、４９９３勝だ、白夜。最も――――」

愛刀に語りかけるその姿は少年ではなく

「最も、お前に負け続けた２４９９敗も入れなくちゃならないんだろうけどな」

月明かりが照らし続けた少年は紛れも無く少女だった――――

少女の名は杏（あんず）。れっきとした１８歳の少女。

彼女は今、旅の途中だった。

どこに行くか自分でもわからない。とにかく強くなりたいのだ。

それが最後に交わせた、最後の約束だったから。

守りたかった。

白夜との約束を。

かなえられなかった白夜のためにも――――

＊＊＊＊

「はっ！！」

杏の拳が少年、白夜の顔にのめりこむ――――はずだった

「そんなんじゃいつまでたっても、俺には勝てねえな、杏」

余裕たっぷりな声で杏に話し掛ける白夜。

差し込んである刀に手がふれる。

『！！くる！』

白夜の行為を見逃さなかった杏は、すぐさま背中から刀を取り出そうとする。

彼女は常に背中に刀をしまっているのだ。

一瞬だけ、杏が無防備になる。

「俺が、本当に刀使うとでも？」

「あ！」

ごがっ！！

杏が声を出した時には、白夜の強烈な膝当てが決まっていた。

「そこまで！勝者、白夜！」

審判の男が試合終了の合図をする。

「これで俺の２４９９勝目だな」

「絶対、次こそは勝つからね！アタシ負けないよ」

勝者も敗者のどちらにも、笑顔があった。

当時、杏８歳。白夜１０歳という幼い年代だったが、この２人に武術、剣術などで勝てる者はいない。

小さな町ということもあり２人の存在を知らない者は誰一人として

いなかった。

「おしっ！もう一戦やるか！杏！！」

「あったりまえじゃん！負けないよ！白夜」

元気よく話す2人を観客は見守るしかなかった。

「あ、あの子たち……まだやるきなの？」

「そうみたい……ね」

呆れてものも言えない主婦2人の会話。

杏と白夜は大人に混じって、『何でもあり格闘大会』に出場。

大人ばかり２４８人参加の中、勝ち抜きまくり、今最終決戦が終わったところなのだ。

つまり、杏たちの会話は、『最終決戦』直後の会話。

呆れるのも無理は無い。

「おしっ。『天秤泉』でやるか？」

にやっとする白夜に

「よしっきまりだねっ！」

と即答する杏。

2人は、あっという間に姿を消した。

＊＊＊＊

「あんとき、きづいときゃよかっんだ……俺が、あいつ等の存在に――」

白夜を手にとり、握りしめる。

き づ い て い れ ば

百 夜 は 死 ん で い な か っ た

百夜がいないのは

俺のせい――――――

そう、白夜の近くにいながら、何故気づかなかったかと今でも思う。

「白夜はきづいていたはずだろ？最初から。なのに、何で助けたんだ？なあ、白夜ぁ……」

涙がこぼれてきた。

知っていれば、白夜はいたはずだ、ここに。

だから、自分のせいなのだ。

気づかなかった、俺のせい。

＊＊＊＊

「杏、いつも通りで条件はいいな？」

「じゃなきゃ、面白くなんないって！」

2人が同時に飛翔する。

ごがっ！

空中で交差する足。

ちっと舌打ちをする杏。

『読まれてたかっ……なら――――』

ビュンッ！！

ガキッン！

「――――間一髪だな、杏」

「う、うるさいっ！」

足技を出した後、すぐに刀を取り出そうとしたが、やはり白夜の方が一瞬早かった。

もし、タイミングが外れていたら、杏は傷を負っていただろう。

これは、自分たちにとって『試合』なのだから。

スタッ

同時に地面に足をつける2人。そして、素早く身を翻し

ガキイイイイイン！！

白夜の名刀、紫音（しおん）と杏の鈴藤（りんどう）がぶつかり合う響き。

2人はそのまま動かない。

「――――――おい、杏」

白夜が口を開く。汗をびっしょりかきながら。

「な……に……？」

負けずまいと懸命に力を加える杏にとって、この一言が限界だった。

「どっちが俺たち、先に最強になれるか、勝負しねえか？」

「――――――――――――――はあ？」

表現させると間抜けに聞こえると思うが、彼女は手を抜かず、ごく普通に言った。

意味がわからない、と。

「だから――――――！！！伏せろっ杏！」

険しくなった白夜の表情の意味がわからなかった杏は、動かなかった。

「どうしたの？白夜」

杏が百夜に近づいた時――――

「くるな！」

バンッ！！！！バン！！バンッ

白夜が杏を蹴飛ばすのと、白夜の身体から無数の銃弾が打ち込まれたのは同時だった。

「びゃ、くや……？」

何が起きたか、杏にはわからなかった。

分かることは白夜が死にかけていること。

それから、3人の大人たちに取り囲まれてること。

「びゃ、白夜！！」

駆け寄る杏。

そして

「あいつもだ！あいつらに武器の本当の恐ろしさを教えてやるぞ！」

バンッバンバン！！！……

杏の身体に弾が打ち込まれる。急所は外れているが、痛いものは痛い。

痛みのせいで……いや、己の弱さに杏は負けて身体の動きを止めてしまう。

『白夜が死んだなら…アタシは……』

杏は目を閉じた。

死を受け入れようとした――――

ズバッ！！！！！

「ぐはあっ……こ、こんのやろ……！」

「こ、こいつ不死身か？！」

大人たちの苦痛の叫びが杏の耳に聞こえる。

生ぬるいものが血だということを理解するのに時間がかかった。

「杏！！」

そう言って、逃げようとした瞬間

白夜の胸の中心を刀が後ろから前に向けて貫通した。

音もなく、刀が白夜を襲ったのだ。

ドクドクドク……

大きいような小さいような音をたて、白夜の身体から血が流れ落ちていく。

音をたて、白夜が地に倒れた。

だが、この時の杏には聞こえなかった。

身体の震えは、本能からきたらしい。もう、彼女にはわけがわからなかったのだ。

「刀は、こうやって使うもんだぜ？けけけけっ」

3人目の男がリーダーらしい。

本能で理解する。部下の奴等を捨て駒にして、確実に殺すために待ってたということを。

「――――――――逝け」

杏が低く呟く、そして次の瞬間。

男の上半身と下半身は切り離された。

音もなく、痛みも感じさせず、本能で一振りさせた。

杏の刀に血が流れ落ちる……

＊＊＊＊

「――――あ、んず？」

しばらくして、白夜が目を覚ました。

アタシ以上の傷を負った上、アタシを守るために無茶に動いた。

そのせいで傷口が開いてしまい、血を流しすぎた。
杏にも分かる。もう、手遅れだということくらい。
でも。
涙は、迷うことなく流れていく。

「大丈夫か？怪我」
「人の、心配してる場合じゃ」
「……元気なら、それでいい」
言葉を遮ると無理して笑いながら、白夜は言った。
「なれよ……？お前が」
苦しそうに白夜が声を出す。
こんな時に話すのが間違ってる。
「駄目！話しちゃ駄目だよ……」
アタシの涙を白夜がふいて来る。
血が流れる腕で、ハンカチを無理に、取り出して。

「馬鹿ぁ……」

「お前が、格闘技全ての最、強になるんだ…杏なら、で……きるから」

舌が、上手く回ってない。

白夜はアタシの手を握ると

「やくそく……」

そう言って、永眠した。

血まみれの場所で。

死体がゴロゴロしているところで。

白夜は逝ってしまった。

＊＊＊＊

「あー……俺、寝ちまったんだ、あの夢みながら」

白夜が逝ってから、１０年。

当時の傷は、残ってる。心に。

そして、癒えることはないだろう……一生。

「――――俺、守ってるよな？約束。まだ時間かかると思うけど、見ててくれよ？白夜」

空に向かって、俺は言う。

「力、貸してくれよ？白夜」

俺の愛刀白夜は、百夜の刀。名刀、紫音。

あの時、俺は持ってきてしまった。これ以上、離れたくないから。

俺の刀は、白夜と一緒に埋めた。

俺がこうして生きている間でも、側においていて欲しいから。

今だから、冷静にこんなこと言えっけど、あの時は無我夢中だっただけ。

俺が本当はどう思って埋めたのか、わからない。

白夜を失ってから一人称を変えた。

これも何故だか、自分でもわからない。

俺が、寝る場所を造ろうとしたとき、信じられない言葉が聞こえて

きた。

「ほら、おめえの親父もあんとき殺されたろ？白夜ってガキに」

ドクン

「あー俺の馬鹿親父は、連れの女に殺されたんだ……

名前はしんねえけどな。ま、ガキの女だからって親父もなめてたんだよ」

ドクン。　ドクンドクン

「死体が無かったなら生きてっかもなぁ？で、ひょんな時に俺たちの前に現れる……ってのが王道だ」

どくん、どくん、どくん……

「俺が殺されるわけねーだろ！いつでも出てきてくれて構わねえ！」

「流石、俺たちのリーダーかっこいー！！」

こいつらは

あのときの

こどもなの……か？

何で、こんなとこで、会うの？

俺に、どうしろというんですか？神様。

どくん、どくん！どくん！！

高鳴る心臓を押さえつけ、俺は目を閉じる。

「アイツの男、馬鹿親父に殺されてんだろ？弱い奴ほど良く吠えるから、ほんと面倒な世の中だぜ」

心臓が収まった。

俺は目を開ける――――そして、こいつ等をどうするべきかを悟った。

「お話中悪いんだけど……お前等、白夜を知ってんだな。俺のことも、知ってるみたいだけど――――」

俺は一度、言葉を切り

「お前等の居場所はここにはねえっ！！」

……ゴトン

俺は、一振りで男たちの首をはねた。

「よかったじゃねえか……痛くなかったろ？感謝しろ」

俺は場所を変えることにして、その場を去った。

＊＊＊＊

「……俺、間違ったこと、したか？白夜」

俺は、白夜を掲げ、空に問い掛けた。

血が、落ちる。

あいつ等の、血が月明かりに照らされながら、俺の顔に落ちてくる。

「あいつ等は……当然の裁きをうけたまでだよ、な？」

そう、信じたい。

俺は間違っていないと言うことを、信じたい。

「――――――俺は…白夜、お前の仇を打ちたかったんだよ。

ずっと、ずっと前から……１０年前から」

俺は忘れようとしたけど、忘れられない。

どうしても。

白夜を無我夢中で埋めていたときの、あの復讐心を……忘れることが出来なかったんだ。

ふと、天秤座が俺の視界に入った。

これは、どう判断すれば、いいのだろう……

女神よ。

あなたは俺に何を言いたいのですか？

復讐を遂げたというのに、俺の心は満ち足りない。

「――――――これが、答えなのか……」

俺の呟きに、答えてくれる人は誰もいない。

俺は自然にゆっくりと、顔を空に向けた。

天秤座が、目にしみる――――――

END

（後書き）

短編第三弾は、生と死のお話です。
あなたは天秤座の女神は、何を言いたいと思いますか？

Rue

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4665a/

俺の審判は……

2011年1月27日14時36分発行